

余白 50mm

卒業研究

「花魁の魅力」

22 ポイント
中央揃え

余白 40mm

余白
25mm

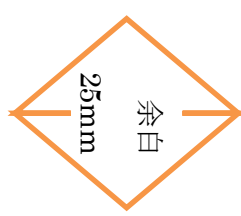
14 ポイント
左揃え

インデント 10 文字

平成 2x 年 (201x 年) 度 入学
甲南女子大学 人間科学部
文化社会学科 ○○ゼミ
231xxxx 番 甲南花子

余白 70mm

ページ番号なし



目次

序論	1
1. 花魁・吉原について	2
(1) 成り立ち・歴史	2
(2) 特徴	4
2. 花魁のカリスマ性	5
(1) 江戸のファッションリーダー	5
(2) 花魁道中	7
結論	8
参考文献	9



ページ番号なし



序論

現代の若者は『花魁』と聞くと、憧れることはあっても、あまり軽蔑したり、否定的な考えはもったりしないだろう。それに対して、お年寄りは『花魁』と聞くとあまり良いイメージを持たない人が多いと考えられる。筆者の祖母に聞いてみても、花魁＝遊女・娼婦というイメージでしかないと言う。しかし、歴史的に見てみても、なぜ、遊女である「花魁」が、特別視されるのだろうか。筆者はこの卒業論文を通して、研究をしたい。

まず、現代の若者は「花魁」に対して憧れることはあっても、あまり壁を感じないであろうと述べたが、なぜだろうか。花魁のことを詳しく知らないということも考えられるが、キャバクラなどの水商売をすることに抵抗がない若者が増加したからかもしれない。また、映画や漫画などで知った人だと、花魁は豪華な着物を着ていて、華やかだが、悲恋などの悲劇のヒロインというイメージを抱いている人が多いと感じる。そして、最近雑誌などで「花魁風」と称した成人式の着付けなどが紹介されており、花魁の本質を知らないまま、これらのイメージが先行し、外見だけの花魁が独り歩きしているように感じる。

私自身も「花魁」は、漫画で認識したのが始まりである。最初のイメージとしては、やはり、豪華な着物を着ており華やかな世界という認識でしかなかった。と同時に遊女の職業のことを全くと言っていい程理解していなかった。また、「花魁」を題材とした物語は、悲恋物が多く、時代は違えど同じ女性としてどこか共感・同情するところがあり、私は歴史小説を読むうちに花魁に引きつけられるようになったのである。

筆者は花魁のどこに魅力を感じ、引きつけられたのか。やはり最初は華やかな世界で豪華な着物という所である。しかし、花魁に関する文献・参考書を読むうちに、花魁は茶道や華道、日本舞踊、和歌や俳句、三味線などといった教養を身に付けないといけないことを知った。これらは、妓楼が抱えの遊女に教養を付けさせることで、遊女としての商品価値を高めるためにしたのだが、筆者はただの遊女ではないところに魅力を感じた。それらの影響を受け筆者は茶道と華道を習っているが、茶道も華道も少しかじったぐらいで出来るものではない。何年もお稽古を通して日々成長していくものである。それらの道を遊女の最高位である「花魁」は極めているというところに物凄く尊敬の念を抱いた。

しかし、遊郭は天国と地獄の共存した所である。遊客には楽園であり、遊女には苦界であった。陽気な性質で、張りが強くて、いつも酒盛りをしていたという奥州太夫の詠

んだ俳句にこのようなものがある。「住み憂かりける廓の今更に悲しくて」と前置きして、「杜若いつ見んことぞ沢ながら」と、よき人に身請けされるのを念じて止まなかった。恥ずかしながら、この俳句を理解したときに初めて筆者は、花魁・遊女たちのおかれている立場というものを、理解出来たのである。時代もあるだろうが、女郎屋に売られ、年季が明けないと吉原から出ることも許されない。そんな一面を知ったのである。

本論文では、吉原と花魁の歴史を紐解きながら、花魁の光と影に迫り、花魁の魅力を浮き彫りにする。そして、なぜ現代社会においても花魁が私たちに惹きつけるのかを考察したい。

1. 花魁・吉原について

(1) 成り立ち・歴史

花魁の成り立ちといっても歴史が深いので、成り立ちについて述べる前に、まず日本の遊女の歴史を概観しておく。

元々、源平時代（1156～1160）の頃に管絃伎楽が発達し、京洛は歓楽の巷になった。管絃の名手といわれた和歌ノ浦は、白拍子の舞を創始した。

白拍子とは、平安時代末期から鎌倉時代にかけて起こった歌舞の一種。及びそれを演ずる芸人。主に男装の遊女や子供が今様や朗詠を歌いながら舞ったものを指すが、男性の白拍子もいた。素拍子（しらびょうし）とも書き、この場合は無伴奏の即興の舞を指す。白拍子は、男女問わずに舞われたものであったが、主として女性・子供が舞う事が多かった。古く遡ると巫女による巫女舞が原点にあったとも言われている。神事において古くから男女の巫が舞を舞う事によって神を憑依させた際に、場合によっては一時的な異性への「変身」作用があると信じられていた。このうち、巫女が布教の行脚中において舞を披露していく中で、次第に芸能を主としていく遊女へと転化していき、そのうちに遊女が巫以来の伝統の影響を受けて男装し、男舞に長けた者を一般に白拍子とも言うようになった。白拍子を舞う女性たちは遊女とはいえ貴族の屋敷に出入りすることも多かったため、見識の高い人が多く、平清盛の愛妾となった祇王や仏御前、源義経の愛妾静御前など貴紳に愛された白拍子も多い。

足利時代の末頃には京都あたりの風呂屋が女を雇って客の接待をさせていた。これが湯女であり、客の入浴中には垢を磨らせ、酒の酌をさせ、さらには褥をともにさせた。高級な遊女傾城たちは、歌舞音曲などで、白拍子の面影を保って貴人の相手をしたが、

風呂屋は下級武士・庶民の好みに適い、やがて料理屋・貸座敷に変わり、さらに転じて妓楼と化していった。

そもそも吉原とは何なのであろうか。それは、一言で言えば、政府が公認していた遊郭である。幕府から正式に営業許可を得た売春地域で、町奉行の支配下にあった。場所は、浅草寺の裏手にあたる千束村である。俗に、「遊女三千」と呼ばれ、二百軒以上の妓楼に合わせて三千人前後の遊女がいたのである。

吉原は「元吉原」と「新吉原」の歴史がある。吉原は、最初の吉原である「元吉原」の時代から昭和 33 年（1958）に完全に遊郭が終了するまで、340 年の長い歴史を有している。その 340 年の歴史を概観すると、図 1 に示すとおり、大雑把に四つの時期に区分出来る。

昭和三十三年 (一九五八)	昭和二十年 (一九四五)			明治元年 (一八六八)		明治元年 (一七六四)		明暦三年 (一六五七)		元和四年 (一六一八)	慶長八年 (一六〇三)
D				C		B		A			
吉原営業終了	太平洋戦争終結	昭和元年 (一九二六)		明治維新		これまでに太夫の称が消える		新吉原として営業開始		元吉原営業開始	家康將軍になる
吉原(新吉原)									元吉原		

図 1 吉原の歴史

AとBの時代は、場所こそ異なるが、ほぼ同じと見てよいだろう。太夫と称される最高位の遊女や揚屋が存在し、客の中心は大名や武士だった。太夫はようやく三回目で肌を許すとか、金には指も触れないほどの伝説が生まれた時期でもある。Cは大衆化した時代である。客の中心は町人となった。最高位の昼三でも初回から客に肌を許したし、不実の客への制裁などもなくなった。

吉原を舞台とした歌舞伎、浄瑠璃、浮世絵などはほとんどこの時期に作られた。また、

現在出版されている時代小説や、制作されている映画・テレビの時代劇もほとんどがこの時期の吉原を舞台にしている。

そのため、現在の日本人が「江戸の吉原」と聞いて思い浮かべるのは、この時期の吉原といってもよい。

格式を重んじる吉原では遊公費もかさんだため、誰もが手軽に遊べたわけではなかったが、それだけに吉原は身分問わず男たちにとって、憧れの場所だった。また、江戸文化のひとつの中心であり、各種流行の発信地でもあった。

ちなみに吉原 340 年の歴史の中で一番繁盛した、吉原全盛期は明暦 3 年（1657）の「新吉原」になってからである。元吉原と違い、新吉原では夜間の営業が許されたため、客は泊まることも出来た。このため、吉原は大いに賑わったのである。当初は身分の高い武士が客の中心であった。

しかし、格式と伝統を誇っていた吉原の繁栄にもかげりが見えてくる。原因は岡場所などの女郎屋である。岡場所は市中にあることから、便利であり、吉原のような格式や伝統に基づくややこしい手続きもなく、価格も安かった。客が岡場所に流れるのは当然であろう。一步で武士階級が衰退するのと対照的に、町人が実力をつけてきたのである。

吉原が終わりを迎えるのは、昭和に入ってからである。昭和 21 年、吉原の楼主代表が公娼廃止を警視庁に申し出て、年季証文も廃棄した。女性の自由営業という形をとったのである。

そして、昭和 33 年 4 月 1 日、売春防止法が本格施工され、吉原は遊郭としての長い歴史に終止符を打ったのである。

(2) 特徴

「あちきは～でありんす」というありんす詞を聞いたことはないだろうか。このありんす詞は、遊女の地方訛を隠すことが目的であった。このありんす詞が出来るまでは、遊女たちは勝手気ままに故郷の言葉を使っており、色気もなにもなかったという。この品格の無さを憂いた当時の楼主らが廓内だけで通用する言葉を造り上げることで、「吉原の品格」を上げようとした。その結果、「ありんす詞」と称する「廓言葉」が生まれたのである。

しかし、「ありんす詞」は吉原全体の共通語ではないのである。例えば、代表的な郭言葉である「あちきは～でありんす」などは、実はどこの妓楼でも使わなかったのである。というのも、見世ごとに独自の「ありんす詞」を生み出していたからである。また、

花魁級の高級遊女のみが使うことを許されていたので、下級遊女たちは口にするのも出来なかったのである。

例えば、主語の「わたし」は、「あっち」や「あちき」、「わちき」や「わっち」など沢山の種類があった。

このありんす詞も、江戸後期になると、高級遊女以下の遊女も口にするようになり、天保年間（1830～1843）になると、完全に使われなくなったのである。

余談になるが、運よく遊女が堅気の男と一緒になれても、一旦なじんだ言葉は残る。そこで、このような川柳が残っている。

- ・ありんすで嫁来なんした里がしれ
- ・ありんすが第一姑気に入らず

このように、奉公が終わり身請けされ念願の素人になれても、今まで使っていた言葉「ありんす」が癖で出てしまい、「ありんす」ひとつで身元がばれてしまうのである。

川柳にあるように、いくら最高位の花魁と言っても結局は遊女と見られ、見下されてしまうのである。つまり、元花魁は決して完全な「素人」にはなれないのだ。

2. 花魁のカリスマ性

(1) 江戸のファッションリーダー

花魁と言えば、序論でも述べたように「豪華で華やか」というイメージが先行する。この章では、その花魁のファッション性を上げたいと思う。

花魁の存在を、初めてマンガなどで知った人がいるとすれば、絶対と言いきっても間違いがないくらい、花魁自身の華やかさに惹かれることであろう。筆者も初めて「花魁」が描かれているマンガで花魁の存在を知った時、花魁のことは何もわからなくても、とにかく華やかな着物と、髪の毛に目を奪われた。花魁と他の女の人の髪の毛の結い方が、違うのはなぜだろうかと思ったし、なぜ着物の帯を前で結んでいるのだろうかとも思い、花魁に興味を持った。

江戸時代、皮肉にも流行の発信源は、幕府が「二大悪所」と名指しした歌舞伎と吉原であった。中でも、花魁の髪型は江戸中の女性の関心の的になった。そもそも髪型は、同じ時代でも年齢と身分で大きく変わる。花魁がしている髪型は京・島原の太夫とも違い、吉原の花魁独自のものである。

時代によって変遷するが、花魁の髷は、兵庫髷が最初である。吉原遊女のモデル髪に

なった立兵庫(横兵庫)は、左右の髷は蝶が羽を広げた形に似たスタイルになっている。その後、島田髷が一世を風靡し、後に勝山髷が大流行する。図 2 に、それぞれの髪型のイラストを示す。



図 2 横兵庫、潰し島田、高島田 (左から順に)

この勝山とは、超人気の花魁の名で圧倒的な美貌と教養と心優しい性格で客にも裏方にも慕われていたという。勝山髷の他にも、彼女は花魁道中での外八文字（従来は内八文字が常識）を最初にしてみせたり、草履の勝山鼻緒を編み出し、流行の発信者として名を馳せたのである。また、一世風靡した島田髷は、現在も結婚式などでお馴染みの文金高島田の花嫁姿で知られているが、これは、江戸では武家の娘の髪型である。そして、島田髷の始まりは島田屋の遊女が結ったことから流行し、広がった。

このように、花魁は吉原だけにとどまらず、世間の流行の発信者となった。町娘などの素人女性は、華やかで流行の発信源であった花魁たちが、遊女ではあるが、憧れでもあったという。

当時のファッションリーダーである花魁たちの着る着物や色柄、帯の締め方や化粧水、紅などを素人女性たちはもてはやしたが、その姿を丸写しすることはなかったという。

しかし筆者は思うが、花魁たちは身請けが決まってからは「素人」の格好しかしていなかったのではないだろうか。これは推測に過ぎないが、花魁たちにとっては「素人」の格好をすることが悲願だったのではないか。流行を生み出し、もてはやされても、自分は花魁・遊女でしかない。早く年季が明けて「素人」になりたいと思ったのではないだろうか。

花魁のファッションで特徴的なものが、「帯」である。私たちが知っている常識だと、着物の帯は後ろで結ぶ。しかし、花魁の帯は前結びである。なぜだろうか。

筆者は、前結びは花魁だけのものであると長い間勘違いしていたのだが、実はそうではない。

「前で帯をするということは、衣服をまとめる紐であるのが本来とすれば当然のことであり、古墳時代の埴輪にも又、平安時代の束帯の飾剣をつける平緒も前に結びたれて

いる。ただ、着装の必要上、脇に結ぶことはあっても、背後で結ぶのは、背面の姿を美化する為であり帯幅が広がった結果として行動の便宜さも考えられる。江戸中期初め、明暦以降、帯幅が広がってからも、西川祐信の絵に見るように前帯が見られ、島原の遊女等にはその風が今日も伝承されている。華やかさを願う若い娘達や型を重んずる公、武家に背面結びが取り入れられた後も、控え目を徳と考えていた一般町家の妻女にその古風が残ったのではなかろうか。」と、あるように、武家の人々以外は前結びをしていたのである。また、花魁は職業柄、帯をほどきやすいように前結びである。と思われがちであるが、これもまた間違いである。古くは、娘は後ろ結び、既婚になると前結びとする習慣だったのである。では、なぜ、花魁は結婚をしていないのに既婚とみなされたかと言うと、花魁は「一夜妻」であると考え、前結びをしたという。また、お歯黒も既婚女性がするものだが、花魁もお歯黒をしていた。この理由も、上記と同じと考えてよいだろう。

(2) 花魁道中

吉原名物と言え、花魁のファッション・ショー「花魁道中」である。ほとんどのマンガや映画などの作品では、必ず花魁道中をする華やかなクライマックスの場面がある。

花魁道中とは、着飾った花魁たちが禿や新造などのお供を引き連れ、三枚歯の塗下駄で八文字を踏みながらゆっくりゆっくりと進む情景だが、これには二つの種類があった。

一つは、現在も観光客用に行われている花魁道中に近い種類で、太夫が全盛の頃妓楼から揚屋へ通った道中の名残である。若い者や遣手、男衆も従えての堂々たる行列である。揚屋制度の消滅後は、年賀や花見などの祭り時や、新造のお披露目の際に行われ、宣伝を兼ねての儀式的なものになっていた。図 3 に花魁道中の写真を示す。左から新造、花魁、傘持、遣手。初期にはこのように小規模なものであったが、人数も増え、遊女の身分による格式、棲のとり方、八文字という足の踏み方などそれぞれ作法があった。

もう一つの種類が、花魁の「仲の町張り」に際しての道中である。呼び出しの花魁は客との約束に従って仲の町の茶屋に行って待つわけで、日常勤めだからお付きも新造や禿と小規模だが、それでも見物客の目を惹くには十分な豪華ショーであった。

妓楼から揚屋まではわずかな距離なのだが、指名してくれた大事な客を必死の思いで迎える花魁の心境を、旅に出る程の覚悟で向かうといった意味合いから「道中」と名付けられた。

さまざまな作品で、花魁道中をするクライマックスの場面があるが、筆者は花魁道中

に対して感じることもある。

近年有名になった安野モヨコ原作の映画『さくらん』では、土屋アンナ演じる花魁が自信を持って花魁道中をしており、遊郭で強く美しく、凜と生きてきた女を感じる事が出来る。見ているこちら側も、王道のクライマックスとして気持ちよく見る事が出来る。また、強さと一緒にどこかふっきた印象を受ける。

しかし、原作浅田次郎のドラマ『輪違屋糸里』では、主人公の糸里が桜木太夫になって道中するのだが、『さくらん』のように王道のクライマックスとして気持ちよく見る事が出来ないと筆者は感じる。第三章で詳しく考察するが、糸里の決死の覚悟がひしひしと伝わる道中になっているのである。上戸彩演じる糸里の表情がなんとも言えない。何を考えているのかわからないようにも見える。しかし、それは今までの苦労を周りには見せないようにしていて、なおかつ自分はこの道で生きていくという決意を感じさせた。五社英雄監督の映画『吉原炎上』でも、同じことを感じ取ることが出来る。

筆者は花魁の立場で考えた時に、花魁たちは花魁道中をすることで、遊女としての自分が、ここまで上り詰めたという自信とを示すと同時に、自分の存在を世間にわかってもらいたいという気持ちがあったのではないかと思う。

結論

この卒業研究を通して、花魁の最大の魅力はやはり女としての生き様にあると考える。そこには、花魁の魅力だけでなく、日本だけの独特な文化が背景にあったことも大きいと思う。少しずつだが、江戸の文化＝現在の日本の文化、まずそれが花魁の魅力に繋がると考える。

江戸時代は、鎖国していたことによって国としての機能は最終的には弱まった。しかし、日本独自の文化が育った。現代のように、世界のさまざまな文化、機器、知識を取り入れないと、幕末期の日本のように世界に後れを取るのかもしれない。しかしその反面、たくさんの文化を取り入れることによって、日本独自の文化が薄れていくように感じる。

例えば、今日日本ではJ-POPが衰退していると言われている。その影響もあってか、K-POPが急速に流行している。K-POPも素敵な文化である。しかし、K-POP色が強くなることで多少なりとも、J-POPは打撃を受ける。大げさだが、一つの日本の文化が薄れてしまっていると言えるのではないだろうか。

そんな現代だからこそ、日本の文化を守ろうという日本人の潜在意識が働いているの

ではないだろうか。そして、その意識が歴史を意識し、「花魁」という遊女たちの魅力の増幅に繋がっているということはないだろうか。しかし、一部の若い女性の間で、ただのファッションとしての流行、花魁の本質を見ないままの「花魁」が流行っている状況は「悲しい」の一言に尽きる。

花魁の魅力とは、この卒業研究を通して分かるように、華やかさと強さである。そのような背景で、遊女とて一人の女である。恋愛をして、間夫が出来ても遊女であるため一緒にすることは出来ない。そして、切羽詰まった最終手段として心中する。吉原の花魁は意気地が強いのが、売りの一つである。客が守った「粹」に対して、花魁が通したのは「張り」である。「張り」とは、自分の生き様であり、絶対に曲げられない部分を押し通す姿勢であり、「意気地」ともいう。これもまた、花魁の魅力である。

華やかさのなかにも知的で強さを持った花魁は、現代女性にも通じるものがあり、そこが私たちが惹きつけてやまないのではないか。花魁道中がマンガや映画のクライマックスのシーンとして使われるのは、ただ華やかなだけでなく、知的さ、強さ、それらすべてが詰まっているからではないだろうか。

参考文献

- 浅田次郎,2007,『輪違屋糸里 上・下』文藝春秋.
- 安野モヨコ,2003,『さくらん』講談社.
- 小野武雄,2002,『吉原と島原』講談社.
- 小菅宏,2008,『図解吉原遊郭花魁の秘密』総合図書.
- 永井義男,2008,『吉原入門』学習研究社.
- 花咲一男,2000,『大江戸ものしり図鑑』主婦と生活社.
- 森光子,2010,『吉原花魁日記 光明に芽ぐむ日』朝日新聞出版.
- 森光子,2010,『春駒日記 吉原花魁の日々』朝日新聞出版.
- gotoei,「江戸の女はどのように髪を結ったのか?」,江戸浮世風呂,(2010-12-28,
http://www5.ocn.ne.jp/~ukiyo26/onna_3.html).
- 風俗博物館,「町方女房前帯姿」,風俗博物館,(2011-1-12,
http://www.iz2.or.jp/fukushoku/f_disp.php?page_no=0000160).
- 長崎大学付属図書館,「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」,
幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース,(2010-12-29,

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/category.html>).